

地域生活を送るうえでの現状のまとめ

入院・入所

本人

入所、入院生活が長く、地域移行のイメージがない・できない。
家族に遠慮し、意思表示をしない場合がある。
ピアの利用が十分でないため、地域移行のイメージができない。(病院では年に1回程度)
日々、選択することがない生活の中で人生の大きな選択が難しい。
支援者は心配だったが、重度の身体障害のある人が地域移行を成功させた実例があった。

家族

入院・入所が一番だと考えている人が多い。せつかく入所できたのに...という考えもある。
地域移行が提案されると追い出されてしまうと考える場合がある。
入院がずっとできるものと思っている人もいる。入所との違いがわからない可能性あり。
入所していた施設がGHのバックアップをしていると安心できる。
地域移行を1度失敗した際に再挑戦をやりたがらない。
いつまでも入所はできないと考える家族もいる。

病院・施設
(支援者)

日々の業務で手一杯で地域移行について考える余裕がない。
地域移行することで経営への影響を考慮している人もいるのでは。
周囲を気にして地域移行について発言できない場合や施設にいるべきだと固定概念がある人もいる。
地域移行に前向きなスタッフが多いところもある。
地域移行支援事業の利用が進んでいない。理解も十分ではない。
家族への地域移行の提案を遠慮してしまう。

地域

越路地域は小学校と交流しているため、地域の理解度が高く、ボランティアも多い。
うらら長岡付近のGHは地域理解があり、子どもたちが遊びにくる。
王見台では、利用者向けのイベントを地域にも開放し交流が生まれた。
コロニーでは、イベントを開催してもあまり若い人が来ない。(地域周辺の高齢化)
更生園がバックアップ施設となっているGHでは、有事の際、更生園が対応している。
利用者の多いバス路線では、呼びかけや徐行運転をしてくれることもある。

現状から改めてどんなことに取り組む必要があるか？

入院
入所
に対して

本人に対して

やりたいことを見つける(意思決定支援) →実施するには地域移行が必要、というようにプロセスを踏みながら進める。
地域移行したメリット・魅力を見つけるため、ピアの活用をする。
入院患者の入所や施設利用者の在宅が体験できるとよい(サービスの利用ができれば良い)→本人が納得したら地域移行支援事業を利用する。
地域移行ができそうな利用者に対し、アプローチを続ける。

家族に対して

家族にも一緒に本人のやりたいことを考えてもらう。(方向性の共有を図る。)
家族が不安に思っていることを把握し、安心してもらうようやりとりを行う(必要経費の説明等)
地域移行パンフレットの渡し方の工夫をする。

病院・施設
(支援者)に対して

若手職員や非正規職員が意見を出しやすい環境整備を行う。
(コロニーでは終礼を取り入れた。)
固定概念のある職員の考えを変えていく。職員への啓発。

地域に
対して

福祉教育の実施→差別偏見の解消。地域生活の理解を得る。福祉人材の確保
スーパーやバス会社等に説明し、地域移行した本人が利用した際の理解を広げる。
地域に開かれた施設(イベント開催等)を行い、地域の土壌をよりよくなる。